

聖書：ルカの福音書 13章 20～30節

説教：狭い門から入りなさい

1 「努力して狭い門から入りなさい」

大学や高校の入試のシーズンが近づくと、ニュースなどで「競争率〇〇倍の狭き門になっています」と言われるのを耳にします。すっかりなじみになっている「狭き門」という表現は、聖書の「努力して狭い門から入りなさい」がもととなっています。

23節で、ある人がイエスに質問しました。「主よ。救われる者は少ないのですか。」これに対しイエスは答えます。「努力して狭い門から入りなさい。」ここを読み、救いの門は、かなり努力しなければ入れない。これなら救われる人はかなり少ないのではないか。そんな印象を持ってしまいます。そうしますと、先に救われた方々は超難関コースを勝ち抜いてきたエリートと言うことになります。皆さん、そんな実感がありますか。私はありません。自分のことをふり返ると努力したから救われた訳でも何でもありません。気がついたいつの間にか救われていました。正式な門から入ったのではなく、裏口からこっそり入ったのか。まさかそんなこともないでしょう。であれば、いったいイエスはなぜこのようなことを語ったのか。今日はそこに目を留めていきます。

2 救われる者は少ないのですか

1) 入ろうとしても入れない人たちがいる

24節の後半はこう続きます。「なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろうとしても、入れなくなる人が多いのですから。」

救われる者は少ないのですかという質問に対して、入れなくなる人が多いと言うのですから、当然、救われる者は少ないのだろうと考えます。あの人も救われたい、この人も救われたい。ごく少数の人しか救われたい。まことに救いの門というものは小さくて狭い。そんな印象がますます強くなります。

でも、主は何をするために私たちのところに来られたのですか。私たちを救うためにです。私たちを神の国に招き入れるために来られ、十字架で死んでいかれました。そこまでしてくださったのに、救われる者は少ない。主は一生懸命努力し、確かに救われた者も出たけれど、でもほとんどの人は救われたい。もし本当にそうならば、主の努力は無駄だったということになります。そういうことでしょうか。これはまた後で触れたいと思います。

ここを読むと、だれか救われ、だれか救われられないのか。だれか神の国に入ることが許され、だれか許されないのか。私は本当に神の国に入ることができるのか。そういうことが気になります。心では、こんな私でも神の国に入れるかもしれないとひそかに期待していたけれど、実は入れない。もしそうだったらどうしよう。そんな不安がどこかにあります。

そんな私たちに、主は一つのたとえ話を話されます。たとえ話はこうです。家の主人が戸を閉めようとしたとき、外にいた人は戸をたたき、こう言います。「ご主人さま。あけ

てください。」ところが家の主人は「あなたがたどこの者か、私は知らない」と言って、外に追い出そうとします。なおもあきらめきれず、外にいる者は訴えます。「私たちは、ご一緒に、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。」これに対し、家の主人は、「私はあなたがたどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい」と言い、戸をたたいていた人たちを外に投げ出してしまいます。

このたとえ話の家の主人、だれのことだか。いつものパターンですからおわかりでしょう。家の主人は父なる神を現しています。聖書には、この世はいつまでも永遠に続くのではなく、それはいつかはわからないけれども、必ずさばきの日が来ると書かれています。家の主人が立ち上がって戸を閉めるとあるのは、そのさばきの日のことを意味しています。その日、救いの門は閉じられます。

だから戸が開いている間に早く救われて救いの中に入れられなさい。そういうことになります。ではいった、どのようにして救いの門をくぐるのか。どんな者たちが救われるのでしょうか。

2) 私たちは努力をしました！

救いの門を入ろうとして外に立っていた人たちは、こう叫んでいます。「私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。」

彼らは聖書をよく読み、研究し、神からよく教えていただいた者です。あなたはとはいつも一緒に食事をしました。だからあなたは私たちをよくご存じのはずです。ですから、

あなたがこの扉を開けてくださるのは当然です。これに対し、家の主人は言います。「私はあなたがたどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。」

外にいる者たちの言い分は家の主人には通じなかったようです。いったいこれはどうしたことなのでしょう。そもそも、外に追い出された人たちとは、いったいだれのことなのか。もしかして、それは私のことなのか。実は、イエスはある人々のことを頭に置いて、このたとえを話しております。

3) 十八年病んでいた女性

その人たちのことは、前回の箇所に出て来ます。そこには、安息日にイエスが十八年間の病で腰が曲がってしまっていた女性をいやしたことが書かれています。これを見ていた会堂管理者は、14節でこう言って非難をします。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」確かに、聖書には安息日は働いてはならないと書いてあります。病気を治療するのは労働である。その安息日に、病気を直すとは何事だ。そういう言い分です。聖書をよく学び研究している。自分たちは、神の律法を厳格に守っている。自分たちは正しい人間である。彼らはそう信じて疑っていませんでした。

イエスはこの会堂管理者にこう言って反論します。16節。「偽善者たち。」「この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」

会堂管理者は言いました。「今日はだめだ。他の日にもう一度出直してこい。」でも、そ

の女性は腰が曲がっていました。歩くのがどれだけつらいことか、見ただけでわかります。そんな人に向かって「出直してこい」と言う。なんと冷たい言い方なのか。だれだって思うでしょう。「今日直してもらってよかったね」と言って、いっしょに喜ぶ。それがあたりまえではないですか。イエスは何も特別なことを言ったのではありません。私たちの思いを代弁しているだけです。

30節でイエスは、「いま先頭の者がしんがりになるのです」と言われました。会堂管理者は、自分こそ先頭に立っている。救いの門に一番先に入ることができると自信をもっていました。しかし、「偽善者たち」と叱られてしまいました。彼らは、救いの門からもっとも遠いところにいました。

4) 入る者

では、いったいだれが救いの門から入れるのでしょうか。もういちど、安息日の出来事を振り返ります。十八年間病に苦しんでいた女性は、「あなたの病気やいやされました」と主からことばをいただき、いやされました。いやされたということは、救われたということです。イエスは、この女性をアブラハムの娘とまで呼ばれました。

この女性は、なにか努力したので狭い門から入ることができ、救われましたか。なにもしていません。そもそも、努力しようとしてできないからだでした。十八年間、汚れた病の霊につかれたままだったのです。そのことで苦しみを味わってきました。その女性に向かい会堂管理者は吐き捨てるように言いました。「出直してこい。」会堂から出て行くべきだと考えているのです。ところが、その女性が先に救われました。「今しんがりの者

があとで先頭になる。」そのことばのとおりになりました。

3 神の国

1) 律法学者たちへの皮肉

「努力して狭い門から入りなさい。」イエスはどんな意味でこのことばを語ったのでしょうか。

会堂管理者、律法学者たちは救われるためには一生懸命努力しなければならないと考えていました。努力の結果、どうなったか。病にある女性を冷たくあしらい、会堂から追い出そうとします。

でも、イエスは何をするために来られましたか。私たちが救うために来られました。救いの門を広くして、できればすべての人を神の国に招くために、十字架におかかりにさえなりました。だから救いの門は、本来は実に広いのです。その門を狭くしたのはいったいだれですか。神ではありません。努力しなければ救われないと考えた人たちが自分の手で狭くしてしまった。「努力して狭い門から入りなさい。」努力しなければ救われないと考えている人たちへの痛烈な皮肉です。

2) 身を低くされた者が簡単にくぐることができる

では、だれが救われるのでしょうか。救いの門は広いと言いましたが、一つだけ条件があります。先ほどの反対のことを述べるようですが、この救いの門は横には十分広いのですが、ある人たちにとっては、低く見えると言えます。そういう意味で狭いとも言えます。低い戸をくぐるためにはどうしなければなりませんか。腰をかかめなければくぐり抜けられません。十八年間腰の曲がった女性はど

うしましたか。病のために腰を曲げるしかなかった。それがあつたので、何も努力もせず救いの門をくぐることができました。

からだの障がい、病気、苦しみ、弱さ。人の目にはみな、一番しんがりにはしか見えません。ところが、弱さがあつたおかげで救いの門をくぐることができる。人の目には、マイナスとしか見えないこと、不利にはしか見えないこと、隠しておきたいようなこと、そんなことが実は救いの門をくぐるときに、あなたを助けてくれる力になる。そう言っているのです。

努力して病気になる人はいません。努力して弱くなる人もいません。マイナスと思えることは、いつも向こうの方からある日突然、襲って来ます。私たちは自分の不幸を嘆きます。でもそのとき、私たちは実は救いの門に最も近いところに招かれています。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」このみことばのとおりのことを、主は私たちにしてくださいませ。